



右/朝礼を終え、現場へ。設計図通りに施工されているか、測量をして確認する。  
左/高原現場代理人、高橋職員との打ち合わせ。今日の確認ポイントなどを共有する。

私の現場  
komachi's  
point

小原理恵は一九八〇（昭和五十五）年、東京都生まれ。東京都出身の父と北海道出身の母、姉と弟の五人家族という環境で育った。初めて「土木」を意識したのは小学四年生。母の実家に帰省した時のできごとだった。青函トンネルが完成し、八〇年の役目を終え廃止が決まった青函連絡船に、記念に乗ることになったのだ。

「行きは青函連絡船、帰りは青函トンネルを使いました。海の中を通るトンネルと聞いていたのでわくわくしていたのに、ずっと真っ暗だったんです」

水族館のチューブ型水槽を想像していた小原は真っ暗な状況が続くことに困惑したが、訪れた資料館でやっと状況を理解した。

「通っていたのは海の中じゃなくて海の下だったんです。『すごいことをする人がいる！どうやったらこんなすごいことができるんだ！』って興奮しました」

それからも工事中に掘り出された石のお土産とともにトンネルへの興味は心に残っていたが、高校一年生の夏、たまたま読んだ本が再び小原の土木魂に火をつけた。

『「トットちゃん」とトットちゃんたち』という黒柳徹子さんの本を読んだんです。アフリカで

は水汲みが子供たちの仕事だって書かれていて、『水道があったら...』という黒柳さんの言葉を読んで、私もそういう人たちの役に立ちたいと思いました」

それが決め手になり、大学進学の際は迷わず土木の道へ。講義の一環で見学した山岳トンネルの現場で改めてトンネルに魅了され、就職活動では現場勤務を志望していた。

**入社から一年、念願のシールド現場へ**

小原が入社した二〇〇三（平成十五）年当時、飛鳥建設(株)に現場勤務の女性はいなかったが、小原の希望を叶えるべく、社内で検討が続けられた。現場に出るための第一歩として組織を知ってほしいという会社の想いで、一年目は技術系の部署に配属となった。そのおかげで現場に出た今では、課題に直面したとき社内の誰に聞けば良いか、即座に判断がつくという。

一年間の内勤を経て、二年目になった小原は念願のシールドトンネルの現場に出る。東京メトロ副都心線北参道―明治神宮間の工事だ。飛鳥建設(株)初の女性現場監督誕生の瞬間だった。

「もう、とにかく毎日面白かったです。今思えば、だいぶ早い段階でいろいろなことにチャレンジさせてもらっていました」

その時の上司は、後ろから見守りつつ、多くのことを任せてくれた。職人との打ち合わせ、材料の発注、工法の決定など、小原が考えたこ

輝け!

けんせつ小町

# 現場監督

## 小原理恵

飛鳥・成友特定建設共同企業体  
町田市鶴見川クリーンセンター建設工事



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。

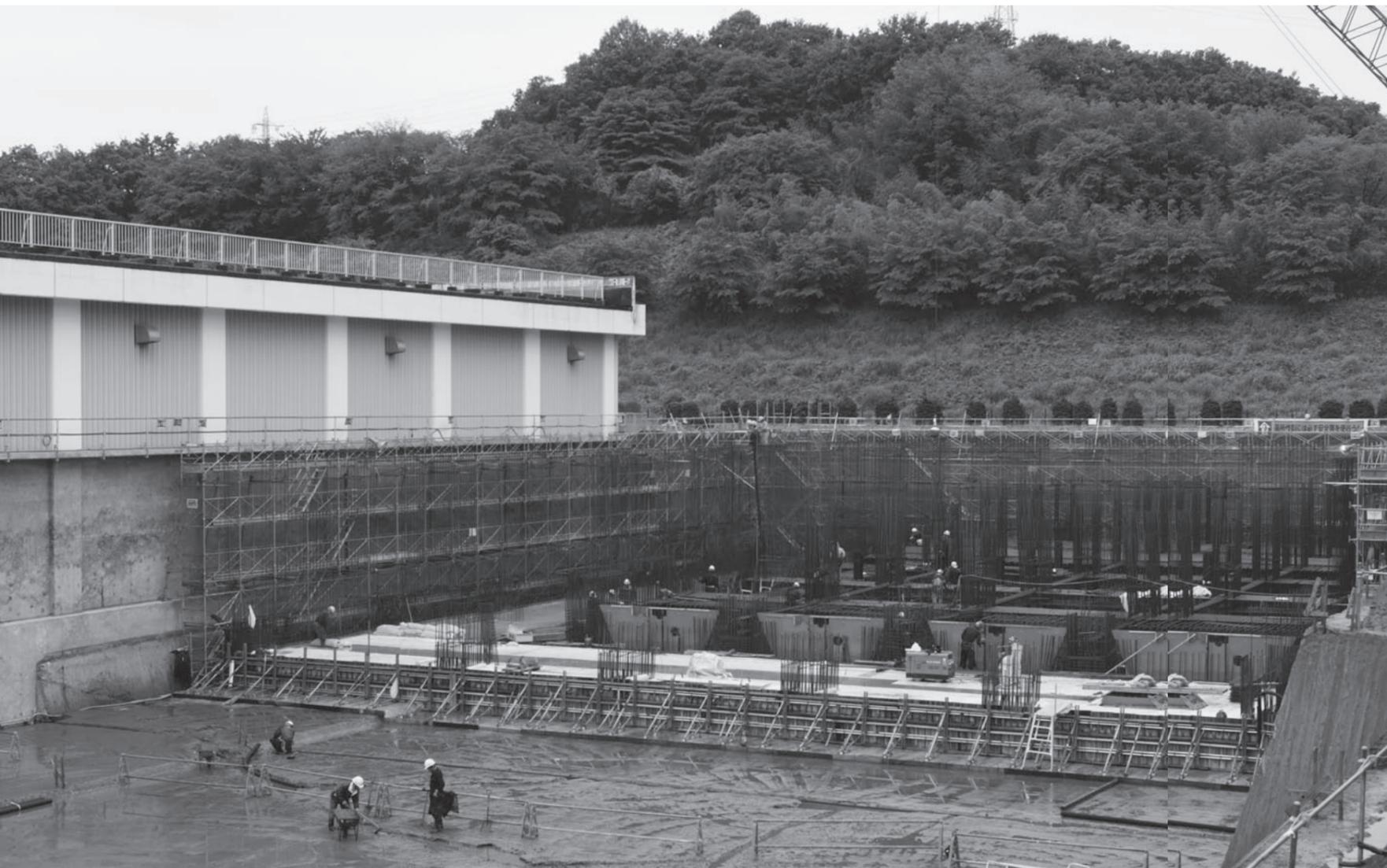
オオタカなどの猛禽類が生息し、自然も多い東京都町田市。住宅地が隣接するエリアの水処理施設として運用される鶴見川クリーンセンターの現場に、今回の主役はいる。10年以上現場に出続け、飛鳥建設(株)の女性活躍をけん引してきた現場の工事主任を取材した。

### 青函トンネルと『トットちゃん』とトットちゃんたちの出会い

は水汲みが子供たちの仕事だって書かれていて、『水道があったら...』という黒柳さんの言葉を読んで、私もそういう人たちの役に立ちたいと思いました」

### 入社から一年、念願のシールド現場へ

それが決め手になり、大学進学の際は迷わず土木の道へ。講義の一環で見学した山岳トンネルの現場で改めてトンネルに魅了され、就職活動では現場勤務を志望していた。



鶴見川処理区の污水管整備に伴い、町田市鶴見川クリーンセンターに流入する水量が増えるため、水処理施設を増設する工事が進む。

## 「現場のみんなの気持ちを集めて、 一つの方向に向けていくことが 私の役割」

「とが現場の決定事項として実行されたのだ。十年が経ち、自分も教える立場になりましたが、そんなに思い切って任せられるものじゃないありません。本当に感謝しています」

現場一年生の小原は何が最善なのか、どうしたら課題が解決できるのかを繰り返し考えた。それを期限内にやり切り、結果につなげること



私の  
仲間  
komachi's  
point

上/所員のみなさん。小原の左隣が高原現場代理人。  
下/現場敷地内にはメダカやアオガエルも生息しているため、暗渠水路が造成されるまでメダカを保護している。

が面白かった。

とは言い若い現場監督が提案すること。職人から「そんなのは無理だ。できねえ」といわれて頭を悩ますこともあった。そんな時にベテランの職長に掛けられた言葉が印象に残っている。「『できないことなんて、本当はないんだよ』って、一緒にやり方を考えてくださったんです。できないって言うのは簡単だけど、考えればたいていのことはできると教えてもらいました」

できないという言葉にはやりたくない気持ちが含まれている。それからは「考えればやれないことはない」という強い気持ちを持ち、現場を前に進めている。

### 何でも自分でやりたい性分

「私、とても短気で、『できない』って言われると『じゃあ自分でやって、できることをみせてやろうじゃないか！』って燃えるんです(笑)」

積極的に意見する小原だが、経験を積むにつれて、一人ではなにもできないことを痛感するという。

「もちろん『やってやる！』という気持ちで挑みますが、自分の力って微力なんです。現場を動かしたいと思ったら、みんなの力がないとできないんです」

任せられる仕事も多くなった。自分でやりたくてもできないことが増え、誰かに頼んでやってもらう必要も出てきた。そんな時こそ現場が一体感を持って、同じ目標に向かい進んでいかねばならない。

「現場のみんなの気持ちを集めて、一つの方角に向けていくことが私の役割でもあるんです。方針を決めて、それを実行してもらって、現場の仕事はそれで初めて成り立つので」

本当は現場のことを全部やりたいし、なんでも知っていたいと明るく笑う小原に高原現場代理人も厚い信頼を寄せる。

「とても優秀なので、安心して仕事を任せられます。次の現場では監理技術者をやってもらいたいですね。わが社初の女性所長誕生の日も近いと期待しています」

### komachi MEMO

「両親の教育方針には感謝しています。自立しすぎて、私はまだ…以下省略です(笑) 弟は結婚して子供が2人いるので、『弟よ、あとは任せた！お姉ちゃんは自由に生きるわ』って言っています(笑)」



profile

おはら・まさえ◎1980(昭和55)年、東京都生まれ。工学部土木工学科を卒業後、2003年4月に飛鳥建設(株)入社。10年にわたりシールド、上下水道などの都市土木の現場に従事し、2015年10月より町田市鶴見川クリーンセンター建設工事で工事主任を務める。

職長の石坂さんと。「外側から見てのタイプの現場監督さんかもしれませんが、小原さんは先頭に立って現場に入っていく姿が印象的です」(石坂職長)

思考し決断したことは  
現場に投影される

小原は両親の方針で、幼少期から自分で選択することを求められた。ささいな日常のことから人生の節目に至るまで、考える時間を与えられ、決めた理由を尋ねられた。

「自分で考えて、自分で決めなさい、いいなりはダメだよ」と教えられました。たとえば中学校卒業の時であれば、高校に進学するのか、女子校か共学か。考えるといくつも判断することがあるんです」

自分がどうなりたいかを想像し、自分で決断する。気付けば自然と考える力がついていた。その力は現場の魅力と通ずるものがある。

「良くも悪くも自分の思考が目に見えて現場に反映されるところが、一番の魅力ですね」  
よく考えていれば、考えたなりものが反映され、考えなければ考えなかった結果がすぐに表れる。

「現場監督には仕事へ真摯に取り組む姿勢と、考える力が必要です。プロフェッショナルとしての仕事を続けて、ゆくゆくは所長になれたらと思っています」

と語り、たくましい表情を見せた。父親ほど年の離れた職人たちの指揮を執り、現場共通の目標に向かってまい進する小原所長と会える日も近いかもしれない。